

白河街区跡・岡崎遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・岡崎遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション新築工事に伴います白河街区跡・岡崎遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

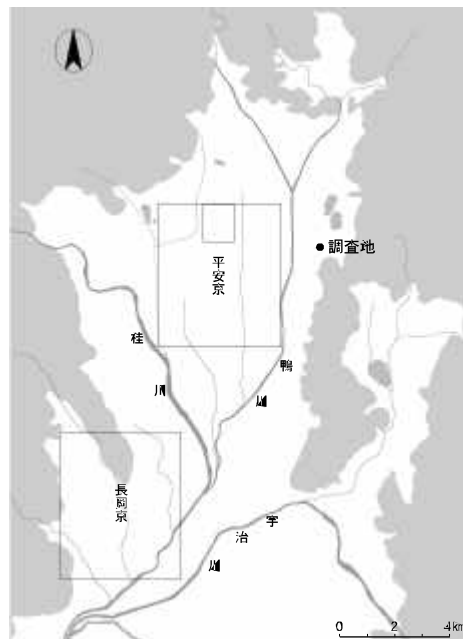
平成15年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・岡崎遺跡
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎円勝寺町64番 1 他
- 3 委託者及び承諾者 有楽興業株式会社 代表取締役 堀 栄里子
- 4 調査期間 2003年 2月17日～2003年 3月25日
- 5 調査面積 約112m²
- 6 調査担当職員 田中利津子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の土器類・瓦類の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 作成担当職員 田中利津子・本 弥八郎

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の環境と周辺の調査	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
(1) 層序と遺構の概要	3
(2) 第 1 面	3
(3) 第 2 面	3
(4) 第 3 面	5
(5) 第 4 面	6
4 . 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 土器類	8
(3) 瓦 類	10
5 . ま と め	12

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 1 面 江戸時代の耕作溝（北から）
		2	第 2 面全景（西から）
図版 2	遺構	1	地業27検出状況（北から）
		2	地業27の基礎検出状況（北から）
		3	土壙25断面（南から）
図版 3	遺構	1	第 3 面全景（西から）
		2	堀26北壁断面（南から）
		3	地業31軒丸瓦検出状況（北西から）
図版 4	遺構	1	第 4 面 流路29東側（南西から）
		2	第 4 面 流路29西側（北東から）
図版 5	遺物	1	流路29出土弥生土器
		2	出土土器
図版 6	遺物		出土軒瓦

插图目次

图1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
图2	調査前風景	2
图3	作業風景	2
图4	第2面遺構平面図 (1 : 100)	4
图5	地業27断面図 西壁 (1 : 50)	4
图6	土壌25断面図 (1 : 40)	4
图7	第3面遺構平面図 (1 : 100)	5
图8	第4面遺構平面図 (1 : 100)	6
图9	流路29断面図 (1 : 40)	6
图10	西壁・北壁断面図 (1 : 50)	7
图11	流路29出土遺物実測図 (1 : 4)	8
图12	堀26出土線刻土器実測図 (1 : 2) ・写真	9
图13	出土土器実測図 (1 : 4)	9
图14	出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	11

表目次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	12

白河街区跡・岡崎遺跡

1. 調査経過

調査地は京都市左京区岡崎円勝寺町にある有楽興業株式会社所有地内で、京都国立近代美術館南側、仁王門通に面し、弥生時代から古墳時代の岡崎遺跡、平安時代後期には六勝寺などが造営された白河街区跡にあたる。この地にマンションが建設されることになり、京都市埋蔵文化財調査センターによって2002年10月2日と11月11日に計4箇所の試掘調査が行われた。この調査で平安時代後期に属する土師器や瓦を包含する南北溝などの遺構が確認されたことから、六勝寺関連の遺構が遺存している可能性が高いと考えられ、今回の発掘調査を実施する運びとなった。なお、杉山信三氏の復元案によると、大治四年（1129）に中宮篤子¹⁾によって造られた御堂である証菩提院の推定地にあたる。

調査区は南北溝が遺存する敷地中央に設け、北側を残土置場とした。調査は2003年2月17日から開始し、重機掘削時の排土は場外に搬出した。その後、調査時の排土は場内処理とし、途中で1度、場外に搬出した。調査の結果、江戸時代から古墳時代の各時代の遺構を検出した。当初想定していた証菩提院の遺構は検出できなかったものの、六勝寺関連では南北方向の幅4mの堀を、弥生時代から古墳時代の土器片を包含する流路などを検出し、2003年3月25日に調査を終了した。

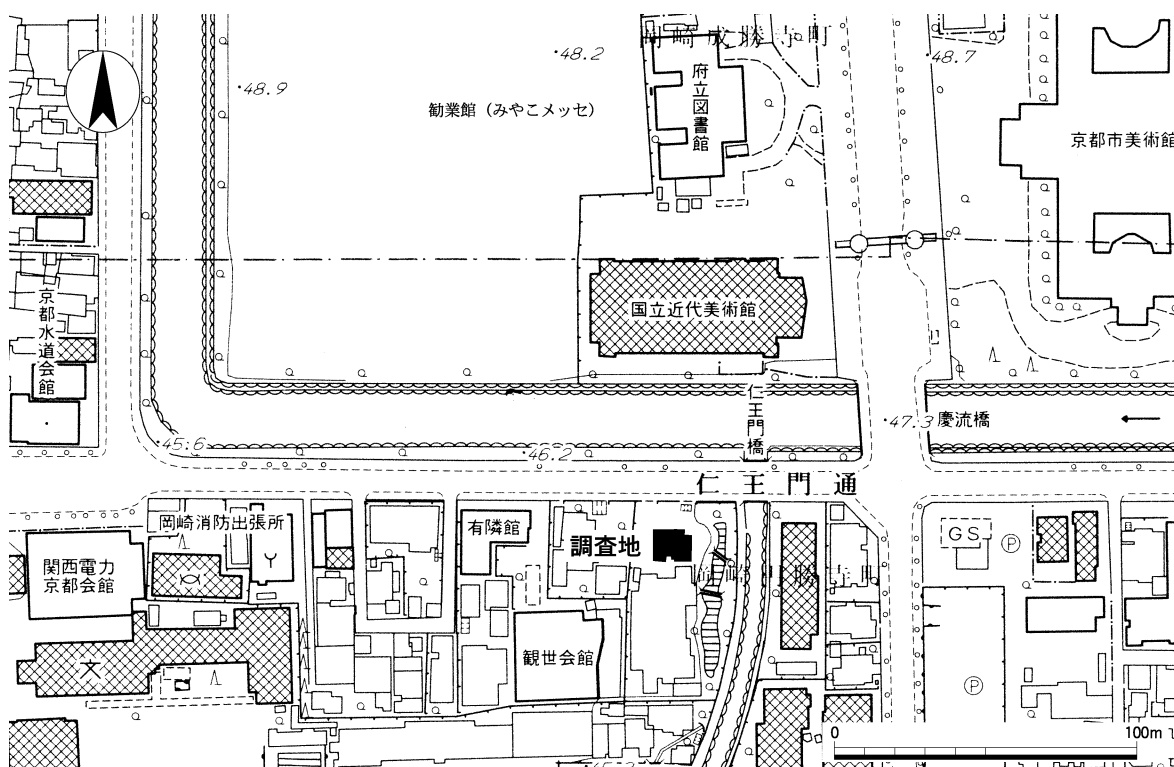


図1 調査位置図(1:2,500)

2 . 遺跡の位置と環境

(1) 位置と環境

調査地を含む岡崎一帯は、北に吉田山、東には比叡山から連なる東山連峰があり、その間を流れる白川の下流域の扇状地に位置する。この扇状地は比叡山と如意ヶ嶽・大文字山の間に割り込んだ花崗岩が、風化・浸食をうけ砂となって白川に運ばれ形成されたものである。この地には、弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在したと推定される岡崎遺跡があり、これまでの発掘調査で遺構や遺物が検出されている。また、平安時代前期には貴族の別業が営まれるほどの景勝の地であった。その一方で、墓所や持仏堂が営まれる葬送地のひとつとして意識されていた²⁾。平安時代後期には白河天皇によって承暦元年(1077)に造営を開始された法勝寺を初めとし、康和四年(1102)に堀河天皇が尊勝寺、元永元年(1118)に鳥羽天皇が最勝寺、大治三年(1128)に待賢門院が円勝寺、保延五年(1139)に崇徳天皇が成勝寺、久安五年(1149)近衛天皇が延勝寺を、それぞれ御願寺として約70年の間に次々と建立された。これらを総称して「六勝寺」と呼ばれているが、周囲にはそれと前後して六勝寺とは別の独立した御堂、大治四年(1129)中宮篤子の証菩提院、長承元年(1132)鳥羽法皇の得長寿院、永治元年(1141)皇后得子(美福門院)の歡喜光院・康治二年(1143)金剛勝院、仁平元年(1151)賀陽院(皇后泰子)の福勝院などが造られ、ここ白河の地は院政期の一大拠点となった。しかしながら元暦二年(1185)の地震や承久三年(1221)の大火などで多大な被害をうけ、その後残った建物も、応仁の乱などで中世にはしだいに姿を消し耕地化され、平安神宮をはじめ、博覧会会場となるなど岡崎の再開発が進む明治二十八年までその状況が維持されていた。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では、1959年の尊勝寺跡発掘調査以来、数多くの調査が行われてきた。最近では1991・92年の岡崎グランド³⁾、1992・93年の勤業館⁴⁾の発掘調査があり、1995年には冷泉通南側歩道・二条通北側歩道の立会調査⁵⁾がある。これらの発掘調査では、弥生時代から古墳時代の墳墓や



図2 調査前風景



図3 作業風景

住居跡、古墳時代の自然流路、平安時代後期の地業や溝・井戸などが検出されている。立会調査では尊勝寺や最勝寺関連の建物、雨落溝、路面とそれに伴う両側溝、築地と内溝などを検出している。それらの調査から地割復元や伽藍配置が確認できるなど、多くの成果を得ている。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要 (図10)

調査区の基本層序は、現代盛土が厚さ45～60cm、江戸時代の耕作土が厚さ10cmあり、その下を遺構第1面とした。江戸時代の土層は厚さが5～10cmあり、調査区南西部では削平されている。室町時代の遺物を包含する土層は厚さ10～20cmあり、調査区全域に遺存する。調査区北壁付近中央部では下層に平安時代後期の地業が10cmあり、その下層が火山灰を含んだ無遺物層となる。無遺物層の標高は45.3 である。また調査区中央では、北東から南西に流れる弥生時代中期から古墳時代初頭の遺物を含む自然流路がある。平安時代後期の堀は、この流路を切って南北方向に造られている。

調査は現代盛土と耕作土を重機掘削し、江戸時代の遺構面を第1面(現地表下50cm)、室町時代の遺構面を第2面、平安時代後期の遺構面を第3面、弥生時代中期から古墳時代の自然流路検出面を第4面とした。

(2) 第1面 (図版1)

江戸時代の遺構には、溝・土壇・景石がある。耕作に伴う溝は調査区東半で検出した。東西方向4条、南北方向4条ある。調査区中央部と西壁際北側で、地山を掘り込んで埋めた景石とみられる石を検出した。景石の材質はともにチャートである。耕作地にするために石を落とし込んだものと考えられる。

(3) 第2面 (図版1・2、図4～6)

室町時代の遺構には、柱穴・溝・地業・土壇がある。

柱穴は調査区東半で検出した。柱痕跡のあるもの、根固めの瓦などが入っているものなどがあるが、建物として把握できない。

表1 遺構概要表

東西溝24は規模が幅1.5m、長さ4.8m以上、深さ24cmあり、東は調査区外に延び、西は試掘坑で削平されている。

建物の地業27は南西部で検出した。地業は東西6.3m、南北3.9mを検出

時 期	遺 構
弥生時代中期 ～古墳時代初頭	流路
平安時代後期	堀、地業
室町時代	柱穴、溝、建物地業、土壇
江戸時代	耕作溝、土壇、景石

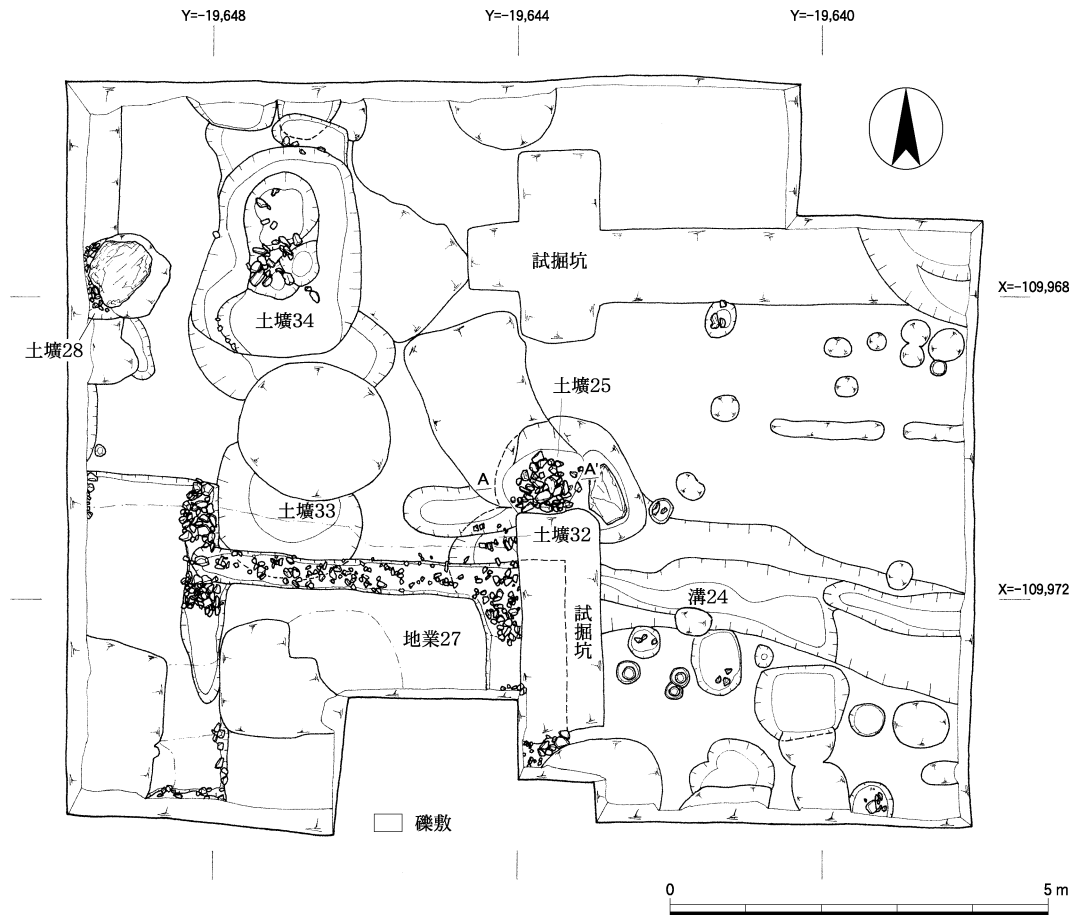
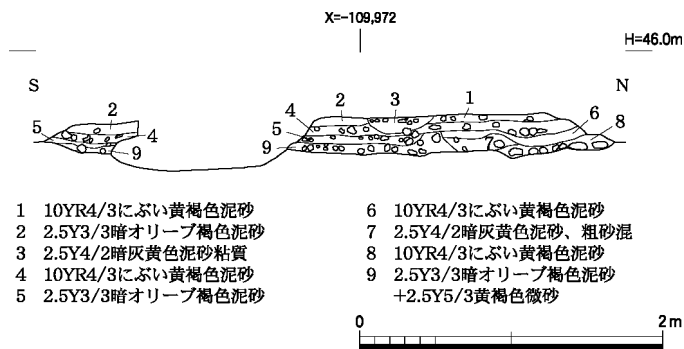


図4 第2面遺構平面図(1:100)

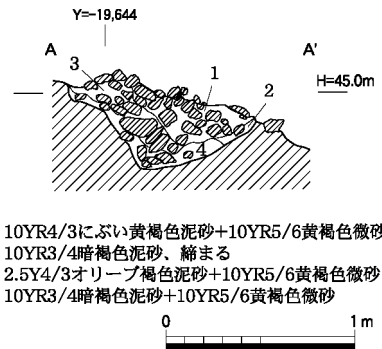
し、西と南は調査区外に広がる。拳大の礫を土でつき固めたもので、厚さは20~30cmあり、地業の作業単位として4層認められる。石敷の下からは地業の基礎部分となる溝状遺構を検出した。東西2条(北から幅50cm・長さ1.7m以上・深さ10cm、幅50cm・長さ4.0m・深さ10cm)、南北2条(西から幅50cm・長さ4.2m以上・深さ6cm、幅50cm・長さ1.5m以上・深さ6cm)あり、それぞれ溝状に掘り込んで、礫を東西には疎に、南北には密に敷かれていた。これらの作業は一連のもので、出土した遺物から室町時代前期に属する。

土壌25は調査区中央部の落とし込まれた景石の西側で検出した。地山を掘り込んで造られ、拳大の礫が詰まっていた。景石を据え付けるための根固めと考えられる。同様に西壁際北側で検出



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 | 6 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 |
| 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 | 7 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、粗砂混 |
| 3 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂粘質 | 8 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 | 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 |
| 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 | +2.5Y5/3黄褐色微砂 |

図5 地業27断面図 西壁(1:50)



- | |
|--------------------------------|
| 1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂+10YR5/6黄褐色微砂 |
| 2 10YR3/4暗褐色泥砂、締まる |
| 3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂+10YR5/6黄褐色微砂 |
| 4 10YR3/4暗褐色泥砂+10YR5/6黄褐色微砂 |

図6 土壌25断面図(1:40)

した土壙28も西壁奥に根固めが存在していると考えられる。このことから地業の北に庭園が造られていた可能性が考えられる。

土壙33は地業27の下面から検出した。規模は長径2.5m、短径1.5mの楕円形で、地山を80cm程掘り込んでいる。またこの北側でも土壙34を検出した。規模は長径3.0m、短径2.0mの不定形で、深さは60cmある。土壙34の周囲にはいくつかの土壙が切り合っており、これらはすべて土取り穴と考えられる。

(4) 第3面(図版3、図7・10)

平安時代後期の遺構は堀と地業がある。

堀26の規模は幅が4.0~5.5m、長さ10.8m以上、深さ1.5mあり、南に広がりながら調査区外南北に延長する。埋土からは平安時代後期の遺物が出土しており、底部には水の流れた跡を示す砂礫と泥土の堆積が30~35cmの厚さで認められる。堆積層からも遺物が出土しているが、埋土上層の遺物と時期差はほとんどなく、堀は堆積が始まってほどなく完全に埋没したことがわかる。

地業31は堀の西肩北部で検出した。南西部は削平されており、遺存している部分は少ないが、拳大の礫に混じって軒丸瓦が、下層からは土師器が出土している。ともに平安時代後期の遺物である。

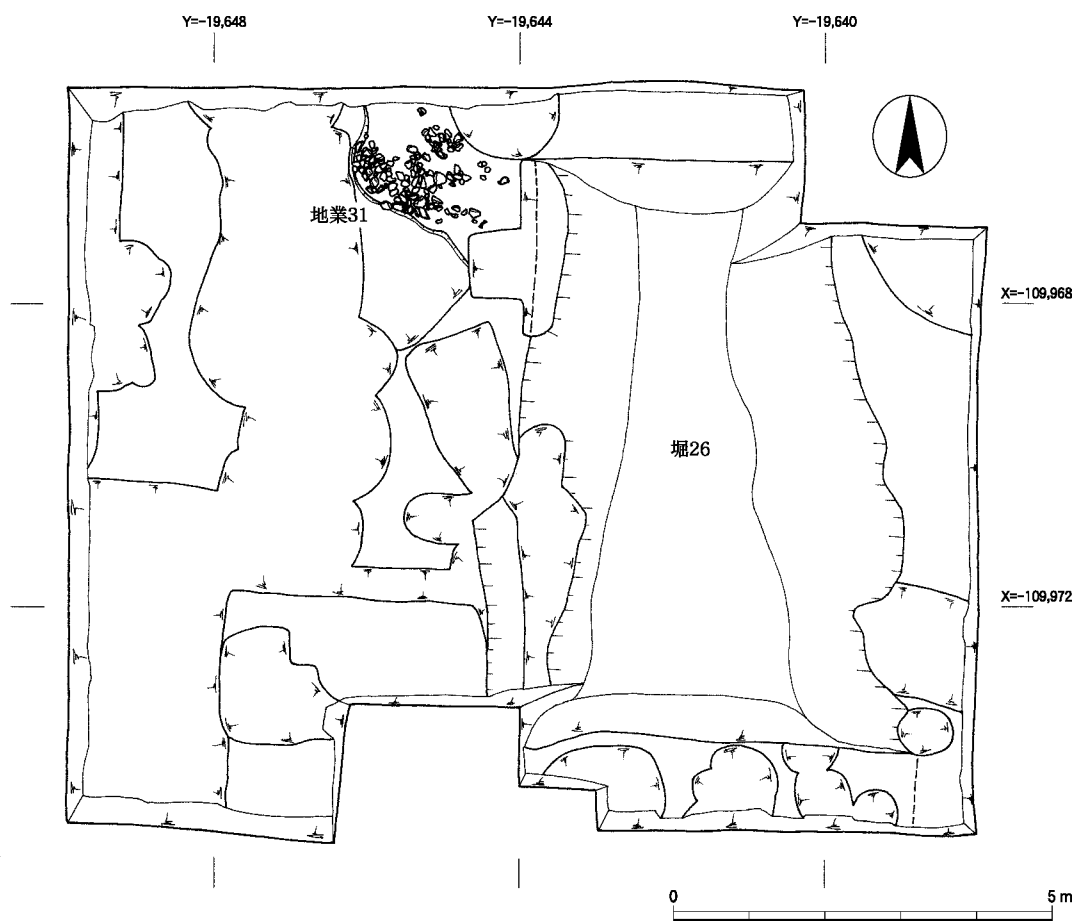


図7 第3面遺構平面図(1:100)

(5) 第 4 面 (図版 4、 図 8・ 9)

弥生時代から古墳時代の遺構では、調査区中央の北東から南西に流れる流路29がある。流路の規模は幅が2.5～4.0m、長さ11.0m以上、深さ50～60cmあり調査区外に延長する。最下層の堆積層から弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土している。

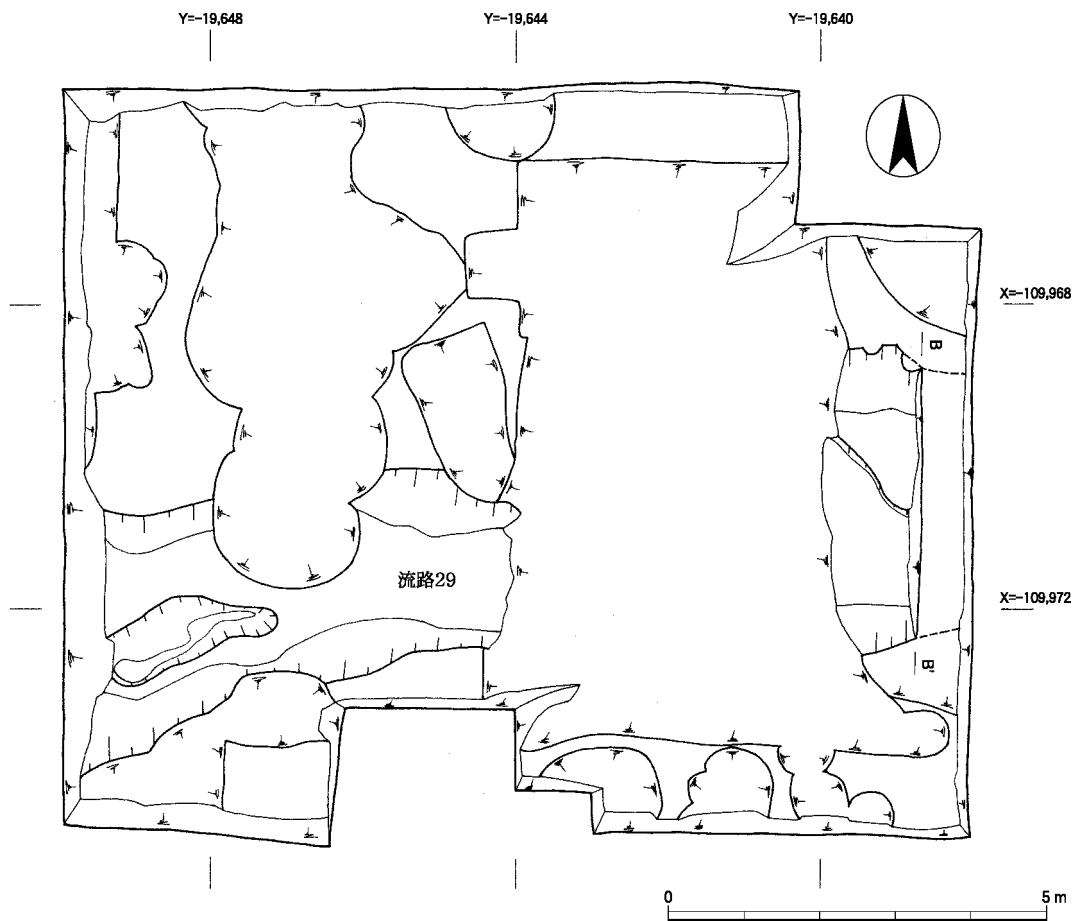


図 8 第 4 面遺構平面図 (1 : 100)

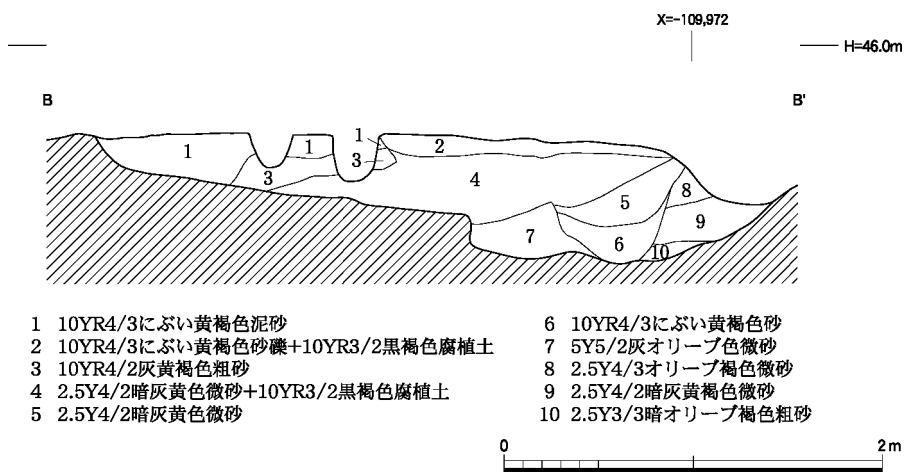


図 9 流路29断面図 (1 : 40)

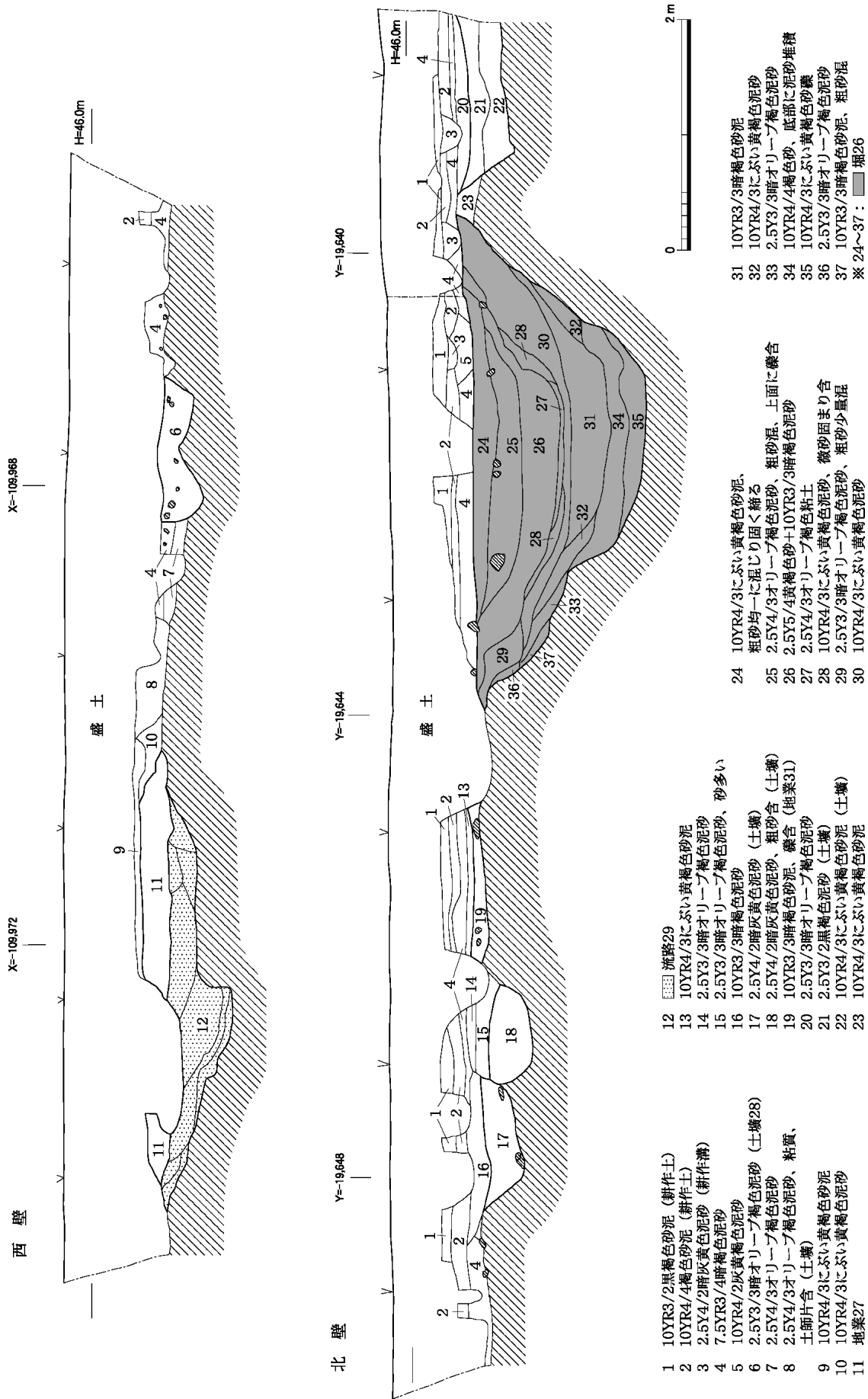


図10 西壁・北壁断面図 (1 : 50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は遺物整理箱にして18箱で、内訳は土器類12箱、瓦類6箱である。遺物の時期は弥生時代から明治時代にわたるが、大半は平安時代後期に属する遺物で堀26からの出土である。

弥生時代中期から古墳時代初頭に属する土器は、壺や甕の破片で、磨滅したものが多い。流路29からの出土がほとんどである。

平安時代後期の遺物は、土器類では土師器・須恵器が多く、他に緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦器がある。輸入陶磁器は白磁の椀や青白磁の合子蓋・瓜型水注、青磁椀、褐釉陶器がある。大半が堀26からの出土である。瓦類は堀26、地業31から出土した以外に、室町時代の遺構に混入していた。

室町時代の遺物は、土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが少量ある。地業27や土壙・柱穴などから出土した。

江戸時代から明治時代の遺物では、江戸時代の耕作溝から出土した「寛永通寶」や明治時代の土壙から一括して出土した染付鉢・椀・皿、国産施釉陶器椀・御神酒徳利、硯、窯道具のサヤ鉢などがある。

(2) 土器類 (図版5、図11~13)

ここでは流路29と堀26から出土した土器類を中心に概略を記述する。

弥生時代中期から古墳時代初頭

1は壺の頸部下半部で、凸帯文に刻みがある。2・3は甕の口縁部で、2は内外面にハケメがある近江系の甕である。4~6は壺の頸部で、クシ描直線文を施す。7は壺の底部で、磨滅して

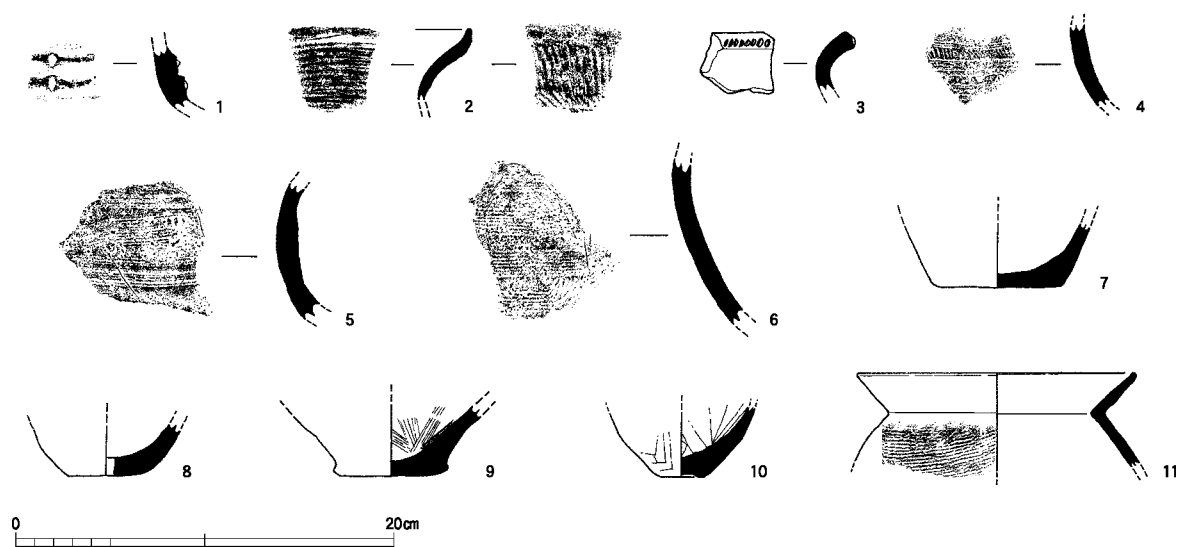


図11 流路29出土土器実測図 (1 : 4)

いるため調整痕は不明である。1～7は弥生時代中期の様式に属する。他に様式に属するものもある。

8は甑の底部で中央に径0.8cmの穴を穿つ。
9は甑の底部で内側にハケメが付く。8・9は弥生時代後期に属する。

10・11は庄内式甑である。10は底部で内側にハケメが付く。11は肩部にタタキがある。古墳時代初頭に属する。

12は弥生時代中期の線刻土器で、壺胴部に絵が描かれている。

1～11は流路29、12は堀26から混入品として出土した。

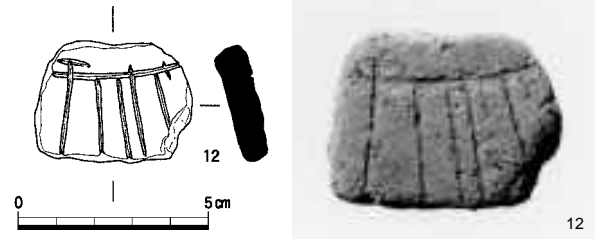


図12 堀26出土線刻土器実測図(1:2)・写真

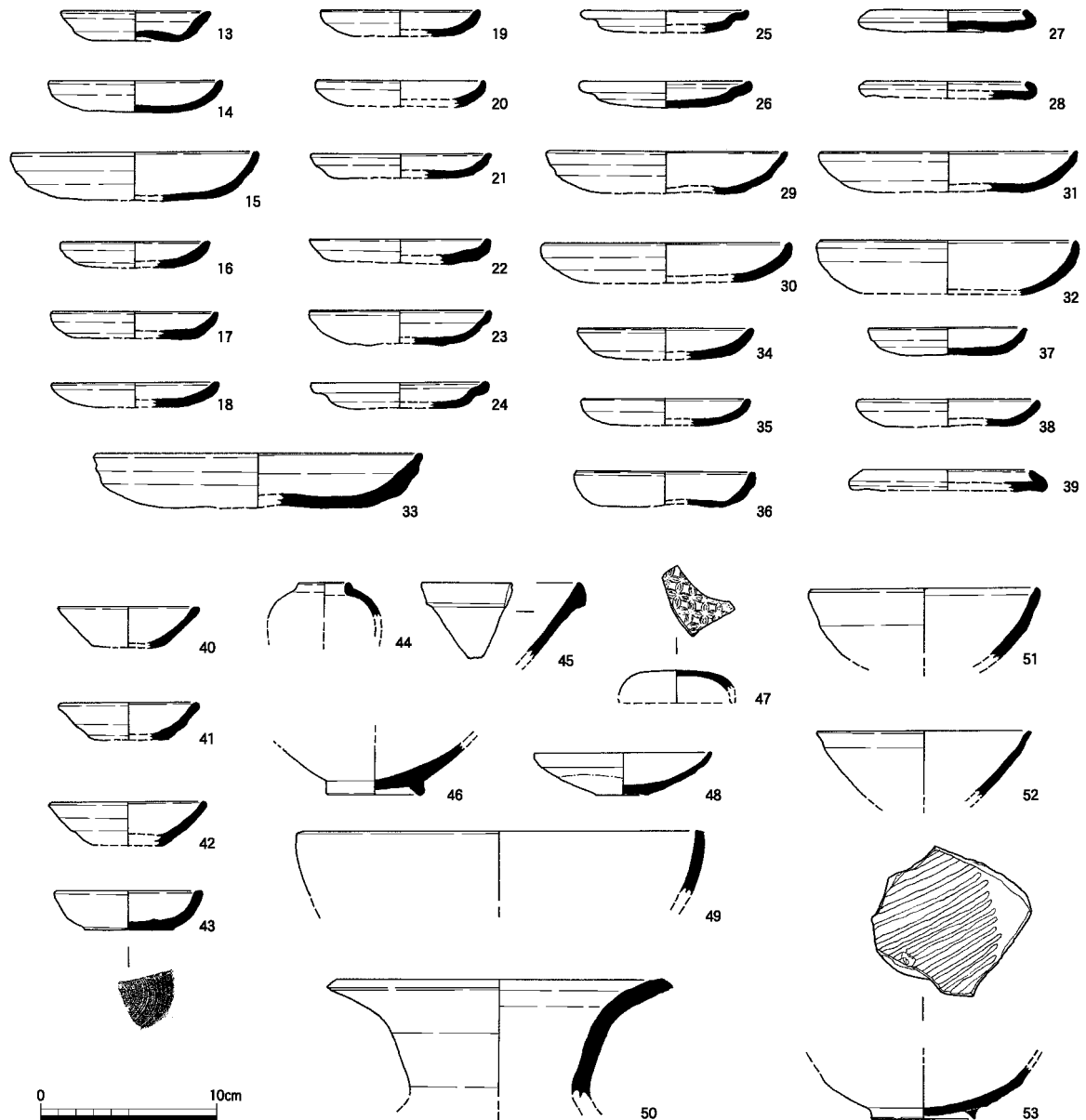


図13 出土土器実測図(1:4)

平安時代後期

土師器皿には口縁部が内弯する小型皿（14・16～23、34～38）・大型皿（15・29～32）、口縁部が強く屈曲する小型皿（24～26）、コースター型の小型皿（27・28・39）がある。33はかなり厚手の大型土師器皿で地方産と考えられる。

須恵器では糸切り底の小型皿（40～43）、鉢口縁部（49）、東海系産の壺口縁部（50）がある。

瓦器では椀（51～53）がある。53の底部内面には粗い直線のミガキが施されている。

輸入磁器には中国産の白磁で小型壺（44）・椀口縁部（45）・椀底部（46）・皿（48）が、青白磁では合子蓋（47）がある。合子蓋の外面には型押の劃花七宝文が施されている。

16～32・40～48・50・51は堀26上層、33～39・49・52・53は下層から出土した。上下層に時期差はほとんどなく、これらの土器類は 期の中～新に属する。14は土壙32の混入で、15は地業31から出土した。

室町時代前期

底部中央がやや凹む土師器小型皿（13）がある。地業27から出土した。

（3）瓦類（図版6、図14）

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、時代別では大半が平安時代後期である。軒瓦は軒丸瓦が13種16点、軒平瓦が5種7点である。室町時代の瓦は丸瓦・平瓦のみで、土取り穴や柱穴から出土している。

平安時代中期

軒平瓦（67）が1種1点で、11世紀代に属する。唐草が緩やかに反転し、枝葉の先は2つに分かれその間にハート形の蓄状文様がつく。半折曲げ技法で大和産である。堀26から出土した。同文例が内裏跡⁶⁾で出土している。

平安時代後期

軒丸瓦13種16点（54～66）、軒平瓦4種6点（68～73）がある。軒丸瓦はすべて蓮華文である。54は複弁8弁で外区に珠文が巡る。同範瓦が他に1点出土。同文例が六勝寺⁷⁾や播磨魚橋瓦窯跡⁸⁾にある。

55は複弁6弁で中房の周りに蕊帯が巡り蓮子は1+5である。同範瓦が他に2点出土。同文例が法勝寺跡⁹⁾で出土している。

56は複弁8弁で間弁が盛り上がり蕊は形式化している。瓦当部の製作技法は、瓦当裏面上端に溝を作り、丸瓦を挿入して接合している。同文例が尊勝寺跡¹⁰⁾、円勝寺跡¹¹⁾、最勝寺跡¹²⁾にある。

57は複弁で、中房は欠損している。瓦当表面に離れ砂を使用している。同文例が尊勝寺跡¹³⁾、白河北殿北辺¹⁴⁾で出土している。

58は複弁8弁蓮華文で蓮子の間に「+」を配する。同文例が法勝寺跡¹⁵⁾で出土している。製作技法は56と同様である。

60・61は単弁で外区に珠文が巡る。同文例が最勝寺、円勝寺跡で出土している。

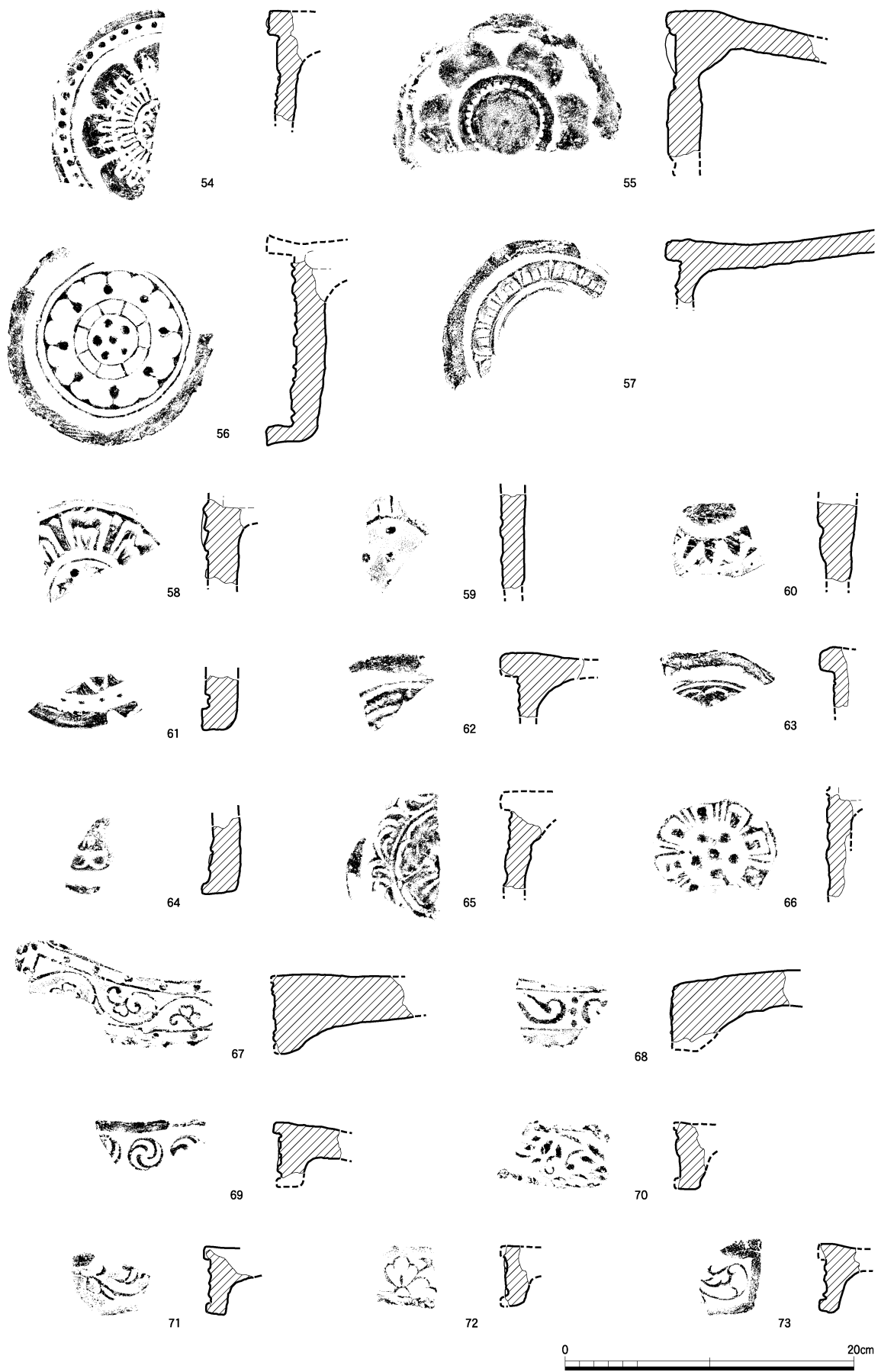


图14 出土軒瓦拓影·实测图(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代中期～後期	弥生土器	18箱	弥生土器11点	6箱	10箱
古墳時代初頭	土師器		土師器1点		
平安時代後期	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、鉄製品		土師器26点、須恵器6点、瓦器3点、白磁4点、青白磁1点、軒丸瓦13点、軒平瓦7点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類	1箱	土師器1点	0箱	1箱
江戸時代～明治時代	焼締陶器、施釉陶器、磁器、染付、窯道具(サヤ鉢)、硯、銭貨	1箱		0箱	1箱
計		20箱	73点(2箱)	6箱	12箱

65は複弁8弁蓮華文で外区に唐草が10転する。同文例が最勝寺跡にある。

66は単弁8弁で、同文例は仁和寺¹⁶⁾の他に平安宮内膳司跡¹⁷⁾、三條西殿跡¹⁸⁾、高倉・曇華院跡¹⁹⁾がある。平安京内で多く出土している。

68は中央に珠文を三つ縦に配し唐草文が左右に展開する。同文例が円勝寺跡²⁰⁾、平安宮内裏跡、東寺で出土している。半折曲げ技法である。

69は右巻の三巴文を連続して配する。同文例が播磨魚橋瓦窯跡にある。

70は宝相華文である。69・70ともに顎貼付技法である。

71～73は72を中心飾りとする唐草文の同一系の軒瓦である。同文例が播磨魚橋瓦窯跡にある。

出土遺構は包含層(4点、54・72・73)、地業31(2点、55)、堀26(8点56～58・60・66～69)、土壇33(2点、59)、土壇25(61)、地業27(6点、62～65・70・71)である。軒瓦の産地は播磨産(54～64・69～73)、讃岐(65)、山城産(66・68)で、播磨産が多い。

5.まとめ

今回の調査の目的は、岡崎遺跡や白河街区(証菩提院)に関連する遺構・遺物の確認であった。

岡崎遺跡に関しては、集落の遺構は確認できなかったが、流路を検出した。堆積層から弥生時代中期から古墳時代の土器が出土しており、この付近に集落が存在したことを示している。ここより北東に位置する岡崎グラウンドの発掘調査では、南に流れる幅3～5mの流路や堰を検出、古墳時代の土器類が多量に出土している。また、1970年の美術館北東で実施された発掘調査²¹⁾では、弥生時代の土器が多数出土している。今回検出した流路は、これらの河川のひとつであろう。

調査区中央東よりで検出した平安時代後期の南北方向の堀は、周辺の調査で検出された同時期の溝や堀と比較するとはるかに大きく、幅や深さにおいては戦国時代の堀を思い起こさせる規模である。水の流れた痕跡を示す砂礫や泥砂の堆積層が認められることから、周囲の側溝から流れ

る水を集めて排水する機能をもっていたものと考えられる。

六勝寺に関しては、近年の発掘調査の成果から法勝寺の位置や尊勝寺・最勝寺の位置・伽藍配置は確定しているものの、その他の寺院配置や伽藍配置などはまだ不明な点が多く、様々な復元案が提示されている。これまでの白河街区における発掘調査成果をもとに割り出した結果、方位が北から東に $0^{\circ}30' \sim 0^{\circ}50'$ 振れることが推定できる²²⁾。このことから今回検出した堀と、1995年の冷泉通の立会調査で検出された最勝寺と尊勝寺を画する路面の東西両側溝、最勝寺の西限を画する築地の内溝との関連を考えてみたい。これらの溝の中心から $0^{\circ}30' \sim 0^{\circ}50'$ 東に振ると、その延長は南の $X=-109,970$ ラインでは、西側溝が $Y=-19,653.7 \sim -19,655.9$ 、東側溝が $Y=-19,644.6 \sim -19,646.8$ 、内溝は $Y=-19,640 \sim -19,642.2$ となる。検出した堀の中心は $Y=-19,641.6$ であるから、その数値から堀は内溝の延長と考えることができ、南北区画の路面などに伴う堀である可能性が高い。しかし、堀の西肩で検出した地業は築地か道路の整地と想定されるものの、後世の削平で遺存状態が悪く断定はできない。

室町時代前期には、堀の埋土上面に地業があり、景石を据えた庭園を伴う建物と考えられる。その後、江戸時代には、景石が落とし込まれ、このあたり一帯は畑地となって利用されていたことがわかる。当初、想定していた証菩提院の遺構は検出できなかったが、弥生時代から江戸時代にかけての遺構の残存状況は比較的良好であることが判明した。

註

- 1) 杉山信三『院の御所と御堂 - 院家建築の研究 -』奈良国立文化財研究所学報第11冊 奈良国立文化財研究所 1962年
- 2) 京都市編「第8巻 左京区」『史料 京都の歴史』 平凡社 1985年
- 3) 内田好昭・丸川義弘・平方幸雄「白河街区跡 12最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4) 網 伸也・会下和宏・桜井みどり「白河街区跡 16成勝寺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5) 堀内明博「白河街区跡 8六勝寺跡・岡崎遺跡」「白河街区」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 平安博物館編『平安京古瓦図録』 雄山閣 1977年 掲載番号459
- 7) 伊藤清造「京畿地方に於ける古瓦文様の研究(六)」『考古學雑誌』第10巻第4号 日本考古学会編 1919年
- 8) 今里幾次「播磨国魚橋瓦窯址の研究」『兵庫史学』第六号 1955年 (「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』 今里幾次論文集刊行会 1980年 に再録)
- 9) 京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 掲載番号406
- 10) 杉山信三・木村捷三郎「六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『六勝寺跡』 六勝寺研究会 1976年
- 11) 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査(下)」『佛教藝術』84号 毎日新聞社 1972年

- 12) 3) に同じ
- 13) 杉山信三ほか「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡第一次 伝飛鳥板蓋宮跡 発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第十冊 奈良国立文化財研究所 1961年
竹原一彦「尊勝寺跡」『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 14) 京都大学埋蔵文化財研究センター編「白河北殿北辺の調査」『京都大学埋蔵文化財調査報告』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 15) 9) に同じ 掲載番号391
- 16) 9) に同じ 掲載番号776
- 17) 京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 18) 古代學協會編『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 (財) 古代學協會 1983
- 19) 古代學協會編『高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第18輯 (財) 古代學協會 1987年
- 20) 4) に同じ 掲載番号469・470
- 21) 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査(上)」『佛教藝術』82号 毎日新聞社 1971年
- 22) 上村和直「平安京と白河」『条里制・古代都市研究』第15号 1999年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・おかざきいせき							
書名	白河街区跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-17							
編集者名	田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかざきいせき 岡崎遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区	26100	401	35度 00分 30秒	135度 47分 05秒	2003年2月 17日～2003 年3月25日	約112m ²	マンション 建設
しらかわがいくあと 白河街区跡	おかざきえんしょうじちやう 岡崎円勝寺町 64番1他		400					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡崎遺跡	集落	弥生時代中期～ 古墳時代初頭	流路	弥生土器、土師器		弥生時代後期の線刻土器が出土した。		
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代後期	堀、地業	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、鉄製品		六勝寺地域の地割りに関連すると考えられる堀、地業を検出した。		
		室町時代	建物地業、柱穴、溝、土壇	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類		室町時代前期の建物地業や景石の据え跡、土取り穴などを検出した。		
		江戸時代	耕作溝、土壇、景石	焼締陶器、施釉陶器、磁器、染付、窯道具、硯、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-17

白河街区跡・岡崎遺跡

発行日 2003年5月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961